

昭和五十二年一月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079  
振替 東京0-58431 労金 東京労金本店 No.329915

購読料 月額300円 6カ月前納制

へもくじ

社会党は共同戦線党であるべきでない ..... 2

職場組織の空洞化に全力 ..... 6

— 日経連の労働運動対策 —

「推進協議会」の文書について ..... 10

■書評■

再版された「種蒔く人」 ..... 15

— 行動する文学への情熱を生き生きと伝える —

# 旬刊 社会通信

NO.6

一九七七年一月二一日

(一九七七年一月二一日発行  
毎月一日・二一日・三一日三回発行)

## 社会党は共同戦線党であるべきでない

### 社会党は共同戦線党か

社会党第四〇回大会以降、社会党内外から「社会党内にはいろいろの傾向をふくんでいるから、社会党を第二次大戦前のような共同戦線党と考へなければならぬ」とする意見が、マスコミ紙上をにぎわしている。たとえば、次のようなめちやくちな見解がある。

「われわれは、このような外部からの『党外党』的存在に変質した協会向坂派の言動を、容認することは出来ません。だから、協会向坂派に反対するたたいは、たんなる派閥争いや、党内主導権の争いとは、根本的に異なるものであります。この問題の根本的解決なくしては、党は『連合時代』に対処して、開かれた勤労国民の党としての共同戦線党のよき、積極面をのぼしてゆくことはできないからです。……第二段階は、協会問題を正しく処理したうえで、共同戦線党としての性格をふまえつつ、その積極面を党の運営機構、組織活動、大衆運動のなかでどう発揚してゆくかという、当面の党改革の問題であります」（党改革推進グループ全国代表者会議『われわれの基本的態度』八月二〇日）。

つまり、社会党は共同戦線党でなければならない、そのためには協会派を排除する必要がある、協会派は「『党外党』的存在に変質し」てしまったからだ、というのである。

この考え方はおかしくはないか。第一に、「共同戦線党」を口実に協会「排除」の姿勢を露骨にうちだしていることであり、これは論理矛盾となる。第二に、山川均の「共同戦線党」論が、戦前と戦後の客観的・主体的条件の相違をふかく考へることなしにもちこまれていることである。

したがって、結論からさきにいえば、社会党を共同戦線党と考へるのは、とんでもない間違いである。こういうことがいえる人は、階級闘争を完全に忘れ去った人か、それとも「社会党の統一と団結だけは守りたい」とする「善意」の人々であろう。しかし、悪意の意識的な人々とはともかく、「善意」でこれを主張する人々には、今日の客観的情勢を精密に調査、研究し、この問題のもつ真の意義を考へていただく必要がある。今日では、戦前とちがって、労働者、勤労諸社会層を基盤にして、社会主義革命を目標とした政党をつくるのが、唯一正しい道だからである。したがって、社会党の綱領的文書『日本における

社会主義への道』は、正しく「われわれは、社会主義革命の指導的政党として日本の社会主義への道を大衆とともに前進する。それだけに党の任務は重大であり、党に対する大衆の要求もきびしくかつ強い」（二八〜二九頁）と、述べているのである。

以下、簡単に山川均の「共同戦線党」論の背景と内容を紹介しよう。

### 山川均の共同戦線党論の背景

戦前、労農派は無産政党の合同を主張し、その実現に全力をつくした。なぜだろうか。当時の日本には、治安維持法、不敬罪、その他幾多の苛酷な弾圧法規が軍隊、特高警察等の暴力機関に守られて存在した。それゆえに、社会主義社会の実現を目標とする社会主義政党は、その存在を許されなかったし、こうした条件のもとでは、社会主義政党が大衆政党として組織される可能性もなかった。したがって、社会主義政党は、社会主義社会の実現、その方法を明らかにかけないで、労働者、勤労諸社会層の日常の要求、つまり今日の生産関係の枠内で実現できる理論的性格をもつ目標をかけた、たまたかうことを余儀なくされていたのである。

この間の事情を山川均は次のように述べている。

「……わが国における今日の段階——その特質は、決定的に優越の地位に上った独占的金融資本の指導の下に、全ブルジョアの要素が強大な反動的、帝国主義的政治勢力に結成する作用が、いままのあたりに急速に進行していることにある。そしてこの反動的、帝国主義的ブルジョアジーの根本戦略は、革命的プロレタリアとその同盟者とを完全に孤立せしめることにある——においては、ブルジョア政治勢力のかような発展段階に対抗し、強大な反対勢力の結成によって、積極的にこの作用を妨げること存している。

それ故に、わが国におけるプロレタリア前衛の根本戦略は、一般的にはその闘争の対象を、明確に反動的、帝国主義的ブルジョアジーの支配におくことである」（『労農』創刊号、一四頁）。

つまり、当時の社会主義者の任務は、いろいろの進歩的イデオロギーと共同して、反動的、帝国主義ブルジョアジーに対抗して民主主義をかちとり、社会主義の実現のために道ならしをすることに集中しなければならぬとしたのである。したがって、労働者、勤労諸社会層の日常的な政治的、経済的要求のための政策で一致すれば、いくらでも合同できたし、合同しなければならぬとするものであった。当時の状況下では原則として合同するところが正しかったからである。

以上が、山川均の「共同戦線党」論の客観的、主体的背景である。

## 山川均の共同戦線党の内容

すでに述べたことから明らかなように、山川均の主張した共同戦線党とは、社会主義的運動の成長の必然的な段階であった。しかし、それは直接に社会主義革命を目的とするものでなかったことは明らかである。つまり、この政党（共同戦線党）のたたいのなかで、社会主義革命の政党に成長していく社会的条件、広範な民主主義の確立をはかる運動をなそうとしたのであった。

したがって、山川均は、共同戦線党の階級的内容について、次のように述べたのである。「……これらの一切の要素を、反動的帝国主義的政治勢力に対する反対勢力として、（それは純然たる、革命的プロレタリアの社会主義的勢力としてではなく）反ブルジョア的政治勢力に結成することにある。それ故に、革命的プロレタリアと、その前衛の歴史的任务の上から見た無産階級の政党は、いまやその政治的支配を確立し、そして帝国主義が進出のために、強大な反動的な政治勢力にまで結成を急いでいるブルジョアジーの支配に対する闘争という一定の限られた闘争目標の下に、あらゆる反対勢力と反対要素とを結合した反ブルジョア共同戦線の特殊な一形態なのである。かような意味においてプロレタリアの歴史的任务の上から見た無産政党は、共同戦線の党である」（『労農』創刊号、一六ページ）。

さらに次のようにも述べる。

「無産政党が共同戦線党であるということは、これを構成する内容が、必然に、必ずしも純一でないことを意味している。共同戦線の特質は、必ずしも、最終目標の精密な一致、または根本原則の完全な一致を条件とするものではなくて、或る限定せられた闘争目的の一致を条件とすることにある。共同戦線という言葉の本来の意味は、独立した団体と団体との間の、かような共同動作を指すものであって、無産政党を共同戦線党という場合には、精密な意味では、これとはちがっている。けれどもなお且つ無産政党は、反動的、反帝国主義的政治勢力との闘争という、限定せられた目標のもとに、最終目的と根本原則とを異にする要素をも、一つの反ブルジョア的政治勢力に結合するという意味で、共同戦線の特殊な一形態だということができる」（同上、一七ページ）。

「したがってそのうちには、革命的プロレタリアの社会主義的要素がある。また搾取者たる地主に対する経済上の関係においては、半プロレタリアであるが、なおかつ封建的な生産形態の上に立つ小作農民がある。代表的な小ブルジョア下層の標本たる小自作農があり、その他の小ブルジョア下層に属する要素がある。共同戦線の一形態としての

無産政党は、これらの異なった諸要素を、反動的、帝国主義的政治勢力に対抗して、ただ一つの単一な、強大な政治勢力に結成することを任務とする。これがプロレタリアの歴史的任務のうちに割当てられたところの、無産政党の限定せられた任務である」(同上、一七ページ)。

これが山川均の共同戦線党論のほぼ全容である。ここで明らかにされていることはなにか。第一に、山川均の共同戦線党論が山川均の「統一戦線」論であるということである。それは、共同戦線党とは、「ブルジョアの支配に対する闘争という一定の限られた闘争目標の下に、あらゆる反対勢力と反対要素を結合した反ブルジョア共同戦線の特殊な一形態なのである」と述べられてあることにも明らかである。こうした戦線が社会主義を目標にかかげるものでないことは、とうぜんのことである。第二に、山川均の「前衛政党」がどのようにしてつくられるかをもしめしていることである。

当時、左翼小児病の偏種である「福本イズム」におかされていた日本共産党は、歴史的条件を深く考えることもなく、山川均の共同戦線党論に悪罵を投げかけた。ところが、歴史とおもしろいものである。社会党の一部の人たちが、山川さんの理解を改良主義的立場からもちあげようとの必死の努力をしているのであるから……。

しばしば歴史はくり返すといわれる。しかし、歴史は同じことをくり返すものではない。階級闘争の発展とともに、さらに高い次元でくり返されることに、大きな注意と関心が払われなければならない。

### 社会党は共同戦線党ではないけない

以上、簡単に見てきたことから明らかなように、山川均の共同戦線党論は、戦前の特殊なわが国の情勢に規定されたものであった。今日の情勢はどうか。戦前とはまったく違う。社会党が社会主義政党であることをしめしうる民主主義の条件を、敗戦による歴史的变化がもたらしたからである。現憲法は政治活動の自由はもちろん、思想・信条の自由・言論・出版の自由を認めている。このことは、日本における社会主義革命のみとおしをたてることを可能にしているばかりでなく、社会主義革命の政党の成立を命じていることを意味している。

こうした条件のもとで社会主義革命を目標としない共同戦線党を主張することは、労働者、勤労諸社会層の利益を守ることを放棄するばかりか、彼らに小指だけをさしのべることを意味している。したがって、もし社会党が共同戦線党だという人があれば、それは、社会党が労働者階級の広範な支持を失って、自滅することに手を借しているといわなければならないであろう。

(加藤俊一)

# 職場組織の空洞化に全力

—— 日経連の労働運動対策 ——

一

現在、政府・独占は、「自主的」に軍備をおこない、「自主的」に軍需工業を強大にすることに よって、巨大な独占利潤を得ようと躍起である。それは、憲法の「改正」を必要とする。そのためには、労働者の諸組織を弱体にする必要がある。社会主義政党、労働組合が民主主義の最大の防破提をなすからである。政府・自民党、そして独占資本の下僕である商業ジャーナリズムがこぞって「国民党論」を支持し、社会党を独占資本にとって弱体無害なものにしようと企てる理由はここにある。

社会主義政党、労働組合が弱体化すればどうなるか。それはいわずして明らかであろう。

二

では、今日の段階における政府・独占資本の「構え」は、なにによって特徴づけられているか。結論からさきにおこう。職場組織の空洞化、日経連の言葉でいえば「職場の安定帯」論である。

独占資本が「自民党一党支配体制」に「危機」感をもちはじめたのは、一九七四年国民春闘の高揚と参院選での自民党の凋落化傾向の顕在化であった。それは、一九七四年五月日経連が「大幅賃上げの行方研究委員会」を発足させたことにも明らかである。彼らの不安と絶望、将来への危惧の所産であった。

いうまでもないことであるが、独占資本の不安と将来への危惧は、労働者階級を分断し、働く者どうしがいがみ合い、競争し合えばし合うほど解消される。彼らは「危機」の時代になればなるほど、追いつめられられるほど「結束」する。他人の労働をただどりする特権を奪われることに、心の底から恐怖するからである。

パリ・コムミュニオンを研究したレーニンには、「ブルジョアジーはどんなことでもする。今日は、自由主義者、急進主義者、共和主義者、あすは、うらぎり……」と書いている。生活は、このレーニンの言葉の正しさを証明した。読者諸氏はおぼえておられるであろう、田中角栄が逮捕されたときの桜田日経連会長の言葉を。彼は平然と「悪いことをすれば、逮捕されるのは当然」とうそぶいたのだ。これが独占資本の本質である。だから、彼らは、みずからの支配を守り、維持するためには、それこそなんでもするのである。

その独占資本家が、「大幅賃上げの行方研究委員会」の発足いらい、経済「新」路線な

るものを高唱しはじめたのだ。だから、「新」路線がなにを意味するかは、すでに明らかであった。彼らは、一生懸命に手あかのついたやり方で地上の天国をえがいてみせた。たとえばこうである。

「日本の経済は、従来、規模の拡大による成長路線を歩んできた。しかし、今日においては、それは限界に達し、新しい路線を開拓する必要にせまられている。そしてこの新路線が開拓されるまでの間政・労・使は相協力して低成長経済にともなうさまざまな経済困難に耐えていかなければならない。……それは過去のような規模の絶えざる拡大を追求する路線をやめ、量の拡大よりは質の向上、素材の増産よりは加工度の向上によって生産性を上昇させることでなければならない。そして、第一に、インフレの脅威なき社会、公害なき社会、適正雇用の社会を建設すること、第二に、省力、省エネルギーに徹し、無駄の排除によって生産性を向上させること、第三に、国際経済の視野からみて、とくにわが国において保護してまで温存する必要のない不適合産業の転業を促進すること、などを実現しなければならない。」

なんのことはない。労働者は生産性向上に協力しろ、「日本丸」を守るために労資が休戦しなければならぬというのである。多くの自覚した労働者は「おやおや、これはちっとも新しくなんかないぞ。だまって首を切られるとのご託宣じゃないか」と、ウンザリした顔でこういうだろう。

もちろん独占資本は、労働者を首切るために、そして労働者をものいわぬ「生産力」におさえこんでしまうために、手をこまねてはいない。だから、彼らは、みずからの体制を守るために、ありとあらゆる時と場所で、ブルジョア思想の宣伝におおわらわとならざるをえない。人間を墮落させる自由が、腐ったバナナをたたき売るかのように大安市場されることになる。これが、「既成社会主義」とやらの批判にむかわざるをえないこともまた明らかであろう。

### 三

こうした状況のもとでの政府・自民党、独占資本家の方策は、一九七五年末の一九〇時間余におよぶスト権スト、そして田中（角栄）逮捕を機にしていよいよ露骨に、かつ鮮明となった。

たとえば、『七六年度版日本の労働経済事情』（日経連発行）では次のようにのべられた。

「われわれは従来、日本の自由社会発展のために①個人の市民的自由②議会制民主主義体制③国民経済運営上ルールのある自由競争と自己責任主義、ならびに市場法則の作動、を守らねばならないと確信してきた。われわれは産業人として労使相い協力して職場を守ることに努力し、「職場を中心とした安定帯を築き、日本の自由社会を守る。」

自由社会、つまり労働者が首を切られ、生命と権利の不安にさらされる自由を守る基礎は、「職場の安定帯」にあるというのである。このようにして、日経連が職場支配の安定こそ、資本主義秩序安定の基礎とみなしていることを知る。

それから一ヶ月後の、日経連の軽井沢セミナー（田中角栄逮捕直後におこなわれた）で桜田氏が、さらにこの考え方を次のように敷衍したことは、とくに注目に値する。

「一九三〇年頃、ドイツ・ヒトラー出現前の様な小党分裂に陥ることは議会政治の終焉であることを警戒すべきであります。我々は日本人の優秀性を信じて待つ心算です。

ところで政治が混乱している間の日本には安定帯がなければなりません。私は企業の職場を中心とする労使が安定帯となり得ると信じます。昭和二〇年初頭から敗戦後の一兩年間頃に経験したところであります。それに警察、裁判所が健全であり所要の官僚組織が健全であれば、政治の混沌期は案外経過出来ると信ずるものです。」

職場に「安定帯」があって、警察、裁判所、官僚組織が「健全」であれば、今日の「危機」は乗り切れるというのである。

さらに、『日経連タイムス』（一九七七年元旦号）で、この人物は、「職場の安定帯」こそが「社会全体の重要な安定帯とな」と、次のようにもべている。

「今後の日本は政治的にも、経済的にも、いままでもより不安定な状態になっていくことだけは、残念ながら間違いのないように思うのですが、しかし、その不安定の中にあっても、職場を中心とした労使関係の安定を保つことができれば、それは社会全体の重要な安定帯となり得ることができると思うからであります。いま、わが国で雇用関係にある人たちは約三千七百万人、官公労を除いても約三千二百万人おります。その中で日経連会員関係の職場に働いておられる人は、一千万人を超えているわけですから、ここの労使関係を本当に安定させることができれば、われわれは日本の非常に大きな社会的安定帯を形づくっていくことができると思うものであります。」

こうして、われわれは、職場の問題がまさに「政治」の問題として、日経連においてとらえられていることを知るのである。

以上が、ここ二〜三年の日経連の基本的な考え方である。

#### 四

そして七八年春闘にたいする日経連の「構え」は、よりいっそう明白なものとなっている。「職場の安定帯」に全力を注がねがならぬというのである。そのためには、反合理化闘争を熱心にしたたかう労働者を職場から放逐しなければならぬ、と。なぜだろうか。職場を中心とする反合理化闘争は、日々のたたかひをつうじて、労働者階級を訓練し、結集し、組織するばかりではなく、階級対立を自覚させ、階級意識を高めずにはおかないからである。だから、独占資本家は、反合理化闘争を蛇蝎のごとく忌み嫌う。このことは、彼らじ



しんの言葉がなによりも明瞭に物語る。たとえばこうである。

「……総評が経営参加を認めることには反対の声が強いのと、参加体制の考え方がまとまっていないため、明確には公言できないわけだが、政策決定に対案を出して関与していく、たとえば国鉄の場合でいえば、赤字国鉄再建に組合が提案を出して働きかける、個別企業でいえば団交を通じて経営方針にタッチするという形をとるといつている。しかし、総評のこの動きを『反合理化闘争』を修正するワン・ステップであるとみるならば大きな意味がある。昭和三〇年代半ばの三井三池闘争から始まったいわゆる反合闘争は総評の基本路線であったが、オイル・ショック以降（一九七三年・筆者）、さらには構造不況の対処に際して、現実には反合闘争を進めることはむずかしくなってきた。そこで非妥協を基本とする反合理化の方針を何とか修正しておかないといけないということ、総評幹部の間ではほぼ合意ができていたと思われるが、これに対しては社会主義協会系を中心に、反対の声も非常に強いのである。そこで、正式議題に取り上げきれないわけだが、参加問題を論ずるには、これを避けて通れまい。』（『日経連タイムス』二〇・二七）

「職場の安定帯」論にまっこうから挑戦するのが、反合理化闘争だということである。しかも、反合理化闘争をもっとも精神的にたたかっているのは、社会主義社会だ。だから、「職場の安定帯」の閉門、社会主義協会に「主要打撃」を与えなければならぬというのである。

日経連によれば、社会主義協会は総評の「ガン」とでもいいたいようだ。一九七七年二月の第四〇回大会以降、自民党の松野頼三氏が社会主義協会を「社会党のガン」といったことがある。今度は、「総評のガンは社会主義協会」というのである。

こうした発言の意味するものはなにか。社会主義協会が「理論闘争を組織する集団」として、独占資本の前に大きく立ちふさがりはじめたということであろう。したがって、独占資本からこれほどまでに社会主義協会がにらまれることは、たいへん名譽なことといわれなければならないであろう。独占資本が好意を抱く、あるいはほめたたえる「社会主義」は、彼らにとって無害な「社会主義」ではないからである。

## 五

このようにみてくれば結論はおのずから明らかとなる。日経連の「職場の安定帯論」に抗して、階級的労働運動の道を守ることである。それは同時に、社会党の右傾化を阻止する力を、職場からつくり出すことでもある。したがって、マルクス、エンゲルス、レーニンがのべていることではあるが、「現在の運動にあっても将来の運動を代表する」活動家になることに努力し、献身的に、ねばりつよく活動し、労働者の眠りこまされている意識を高め、引きだすことである。そのためには理論と実践の統一を自覚的におし進める階級意識を身につけることである。これが今、活動家一人ひとりに問われている課題である。（木村一夫）

## 「推進協議会」の文書について

### 一

資本主義の一般的危機が深まりゆくなかで、全世界的にマルクシズムにたいする攻撃が強まっている。もちろん、わが国もその例外ではない。

これまで、ブルジョア的な「科学者」や「哲学者」たちは、なんとマルクシズムは反駁され、「絶滅」されてしまったと公言したことだろうか。にもかかわらず、彼らは「絶滅」されてしまったはずのマルクシズムの攻撃に、いぜん死力をつくしている。

このことはなを意味しているのだろうか。第一に、マルクシズムが成長し、全世界の労働者階級の心をとらえ、その地歩をしっかりとちかためていること、第二に、それだけ資本主義の活動の余地がせばめられ、資本主義体制そのものが歴史の博物館にたたきこまれる日の遠くないことをしめしていること、第三に、マルクシズムは、ブルジョアジー公認の「科学」によって、「絶滅」されるたびごとに、ますます強く、さらに鍛えられ、いっそう生き生きしたものになってきた、ということがそれである。

われわれは、マルクシズムが全世界的規模で勝利する、そうした時代に生きている。しかし、マルクシズムは、その地位を一挙に獲得したわけではない。レーニンは、一九〇八年の論文『マルクス主義と修正主義』で、マルクシズムの発展は、さまざまな思想潮流とのたたかいのなかで、かちとられたものだと言っている。

「マルクス主義はその成立後の最初の半世紀間（一九世紀の四〇年代以降の）に根本的にはそれに敵対的であつたいろいろな理論との闘争を行つた。四〇年代の前半にはマルクスとエンゲルスとは、哲学的観念論の見地に立つ、急進的な青年ヘーゲル派と決着をつけた。四〇年代の終りには経済学説の分野での闘争が前面に現われた——それはブルードン主義に対してであつた。五〇年代にはこの闘争、すなわち嵐のような一八四八年に姿を現わしたいろいろな学派や学説に対する批判が完了した。六〇年代には闘争は、一般的な理論の分野から直接的な労働運動にもっと近い分野に移つた。インタナショナルからバクーニン主義を追放することがそれであつた。……七〇年代の終りには（ドイツでは）実証主義者のデュリングが登場した。しかし、プロレタリアートに対する影響力はとるにたらぬものであつた。マルクス主義はすでに労働運動のなかの他のすべてのイデオロギーに対して決定的に勝利をおさめつつあつた。

……しかし、マルクス主義がそれに敵対的な多少ともまとまった学説を追いだしてしまつてからは、これらの学説に表現されていた諸傾向は別の道を探しはじめた。闘争の形態と機会とは変わったが、闘争はつづいてきた。そして、マルクス主義成立以来の第二の半世紀は、マルクス主義の内部でマルクス主義に敵対する潮流の闘争から（前世紀の九〇年代）はじまった。

かつては正統的なマルクス主義者であったベルンシュタインは、非常に騒々しく登場し、マルクスの訂正、マルクスの再検討、修正主義をいちばんまとまった形で表現して、この潮流にその名称を与えた。

前マルクス主義的社会主义は紛糾されてしまった。それはもはや自身の独立した地盤のうえではなく、マルクス主義という共通の基盤のうえで、修正主義（改良主義と同義語・引用者）として闘争を継続している。（岩波文庫『カール・マルクス』、一七〇～一七一頁）。

## 二

資本主義の最後の段階である「帝国主義の時代」に活動を開始したレーニン、プレハノフ、カウツキー（両者ともとは正統派マルクス主義者であった）等の、マルクシズムの仮面をかぶった改良主義者と徹底的に闘争し、その階級の本質を明らかにした。

「マルクス主義者は、無政府主義者たちが、改良のための闘争、すなわち権力をこれまでどおり支配階級の手にしたままでの、勤労者の状態の改善のための闘争を認めている。しかし、それと同時に、マルクス主義者は改良主義者にたいしては非常に断固たる闘争を行なっている。彼らは労働者階級の志向と活動とを直接間接に改良に限定している人たちなのである。改良主義は労働者に対するブルジョア的な欺瞞であつて、労働者は、資本の支配が存在しているかぎり、個々の改善にもかかわらず、どこまでも賃金奴隷であることをまぬかれないのである。

自由主義的ブルジョアジーは、一方の手で改良を与えながら、他方の手ではいつでもそれをとりもどし、それを無にしてしまい、改良を利用して労働者を隷属させ、彼らや個々のグループに分裂させ、勤労者の賃金奴隷制を永続させようとする。だから、改良主義がまったく誠実である場合ですら、それは、実際には、ブルジョアジーが労働者を墮落させ、無力にするための武器に転化する。あらゆる国での経験は、労働者が改良主義者を信頼すると、いつでもばかにされる結果になることを示している。

反対に、労働者がマルクスの学説を身につけていれば、すなわち資本の支配が維持されているかぎり、賃金奴隷制が不可避であることを知っていれば、彼らはどのようなブルジョアの改良によってもだまされることはないであろう。資本主義が維持されている場合、改良は決して永続的なものでも本格的なものでもないことを理解している労働者は、改善のために闘い、その改善を、賃金奴隷制に反対する闘争をもっと頑強につづけてゆくために利用している。改良主義者は、施し物によって、労働者を分裂させ、瞞着し、彼らを階級闘争からそらすことに努めている。改良主義の虚偽を知った労働者は、自分たちの階級闘争の発展と拡大のために改良を利用するのである。

改良主義者の労働者に対する影響が強ければ強いほど、それだけですす労働者は無力になり、それだけですすブルジョアジーに依存するようになり、それだけですす容易にブルジョアジーはさまざまな策略によって改良を無に帰してしまふ。労働運動が自立的で奥行が深く、その目標が広大であればあるほど、それが改良主義の狭さから解放されていなければならないほど、それだけですす労働者は個々の改善を強固なものにして、それらを利用するのに成功するのである。

改良主義者はどこの国にもいる。というのは、ブルジョアジーはどこでもあれこれの仕方労働者を墮落させ、奴隷制をなくなってしまうという考えを放棄してしまつた、満足した奴隷にしてしまうことに努めているからである」(同、二〇九〜二一〇頁)。

つまり、改良主義とは、その場かぎりのやり方で自己の行動を決定し、日々の諸事件に、政治上の些事の転変に順応し、プロレタリアートの根本的利害と、全資本主義体制の、全資本主義的進化的基本特徴とを忘れ、目前の現実的な、または想定された利益のためにこれらの根本的利害を犠牲にすることだといふのである。

また、レーニンは改良主義はかならずあれこれの変種を生みださずにはおかないと、次のようにも述べている。

「(改良主義の)政策の本質そのものからまちがいはなく生じてくるのは、この対策がかぎりなく多様な形態をとりうること、またいくらかでも『新しい』問題、いくらかでも思いがけない、予見できなかった事件の転変がおこるたびごとに、たといその転変がごく微少な程度に、またほんの短い期間だけ発展の基本方向を変えるにすぎないとしても、いつでも不可避的に修正主義の変種を生みだすであろうといふことである」(同、一七八頁)。

修正主義、あるいは改良主義について、レーニンの著作から長々と引用した。だが、

このレーニンの言葉から、今日、われわれが考え、学び、このレーニンの思索をさらに深めなければならぬことが、あまりにも多すぎるのではないだろうか。

### 三

こうした「修正主義の変種」——といっても、ひじょうに粗野で、ずさんで、手あかまみれたものだが——の一つが、社会党内の反社会主義協会のごった煮勢力である党改革推進協議会だ。彼らは、「マルクス主義ならいい、だがマルクス・レーニン主義はいけない」といったり、「社会主義はいいが、共産主義はいけない」といった、自覚した労働者なら、あるいは階級の本能を忘れていない労働者なら、ふきださずにはおられない論議を大まじめに演じてみせてくれた。つまり、レーニン主義は「特殊」ロシア的なものだというわけだ。

こうした幼稚な批判がでるのを予期したかのように、レーニンは、労作『共産主義における「左翼」小児病』において、「この論文は、ボリシェヴィズムの歴史と現在の戦術とのなかで一般にあてはまるもの、一般的な意味をもつもの、一般的な拘束力をもつものがあれば、それを西ヨーロッパにあてはめることを目的としている」と、のべている。

第二の論点。これはマルクスの『ゴータ綱領批判』に明らかだ。ここでは、マルクスは直接社会主義という言葉は使っていないが、それは、「資本主義社会からでてきたばかりの共産主義社会」、あるいは「共産主義社会の第一段階」と定義づけられ、その基礎のうえに「労働が生活の手段であるだけでなく、生活の第一の要求とさえなる」共産主義社会のより高い段階（これが今日、一般的に共産主義社会といわれる）に発展するとのべられているからである。

こうしたことは、彼らがマルクシズムのイロハすら知らなければ、まじめに勉強する気もないことを示している。

その彼らが、一月二三日、「われわれがめざす社会党像」なる文書を発表したのだから、どんな「社会主義像」、「社会党像」ができるかは、ほぼ想像できようというものだ。簡単にそのポイントだけを紹介、批判すれば――。

第一に、社会党の綱領的文書『日本における社会主義への道』をまっこうから否定してることである。それは、まず第一に階級および階級闘争を否定することによって、『道』にしろされた社会党の社会主義革命路線の放棄をせまっている。第二に、社会党を社会主義をめざさない共同戦線の党と性格づけることによって、『道』の発展である『国民統一の基本綱領』で明確化された全野党共闘路線を否定し、社会党が長い歴史のなかで労働者とともに、つみあげてきた基本路線の修正をかくしていないことである。連合の道を公然とかかげたことである。第三に、この文書の出発点が資本主義の批判にあるのではなく、

たとえば、「われわれが、かつて社会主義のモデルとした既成の社会主義の中には、自由と民主主義を欠落させたり、本領とする経済の運営についても必ずしも成功していない」とのべることによって、ソ連をはじめとする社会主義諸国批判から出発していることである。しかし奇妙なことは、彼らにとって、毛沢東主義だけはモデルとされていることである。さらに特徴的なことは、『道』の全面的否定を意図する彼らの障害が、『道』の具体化に全力を上げている社会主義協会にあることを白状していることだ。なぜなら同文書はいわゆる党「改革」論議について、「われわれが党の主体制を守るため、党と政治団体である協会との関係を清算することを迫ってきたのも、実は、そうした社会党の根本的再生のためである」とのべているからである。したがって、彼らの「新しい」社会主義像なるものは、現実の資本主義体制の科学的分析をとおしてではなく、科学的社会主義の批判のうえに成りたっていることがわかる。

では、彼らの「新しい」社会主義像はいかなるものだろうか。それは、社会主義協会批判に具体的にあらわれている。たとえば、次のようにのべられているからだ。

「一、協会がかかげる社会主義像は、協会テーゼに示されているように、既存のソ連をモデルとした一党独裁の中央集権的社会主義である。このような社会主義像は、これまで社会党を支持し、また社会党に多くの期待をかけてきた国民のイメージとはおそろしくかけ離れたものである。

最も図式的にいえば、われわれと協会⇨向坂派との対立点は、およそ次の三点に要約できよう。

第一に、基本的な社会主義像について立党の精神（政治的には民主主義、経済的には社会主義、国際的には平和主義）にあるとおり、われわれが『民主主義的な社会主義』を構想するのにたいし、協会は、ゆがめられた『官僚主義的社会主義モデル』に固執する。

第二に、われわれは、各階層の連合による『民主的多数派』の形成をめざすのにたいし、協会は依然として、『社共中心の統一戦線』を基本にしている。

第三に、われわれは、党の基本的性格を単一の世界観の一致を前提とした前衛党的な一枚岩の党としてでなく、社会主義実現の綱領と政策の一致によって結ばれた『共同戦線の党』と規定するのにたいし、協会は、『宗派的な一枚岩党』をめざし、このギャップは、とくに今日の党組織の混乱となつてあらわれている。

ここに、今日のいわゆる社会党の「改革」論議の本質がすべていいつくされている。つまり、党「改革」論争は社会党の基本路線をめぐる問題だということである。社会党を愛し、労働者階級の党としてその発展を願う労働者、勤労者すべてが、このことをしっかりと自覚しなければならないであろう。

(A)

## ■書評■

## 再版された「種蒔く人」

—— 行動する文学への情熱を生き生きと伝える ——

「種蒔く人」の再復刻版が、昨年九月「近代文学研究所」から出版された。発行部数が限定されたこともあり、文学研究者や「種蒔く人」発行地秋田県土崎、秋田地区、あるいは関係者以外あまり知られて居らないと思う。

私が紹介するなど口はばった事を抜きにしても、「種蒔く人」はプロレタリア文学誌であることは論を待たない。大正のデモクラシー、と暗黒政治、社会主義思想の形成時、労働運動の昂揚と政治情勢、労働者の生活等、当時の文献書としても、きわめて重要誌であると言われている。

従来の文筆のみの文学から、行動する文学へと、青年が中心になり限らない情熱と激しく沸き上る意気込み（批判と実践、行動と批判、軍国主義批判など）を持ち、雑誌の中で生き生きと表現されている。ぜひとも青年をはじめ先輩諸氏に購読を進めたい。

『種蒔く人』は、アンリリバルピユスのクラルテ運動（反戦平和のためのレジスタンスのこと、労働者や農民のインターナショナルのほかに、その一翼として思想家や芸術家も国境を越えて反戦運動を展開しようとしたもの）に参加し、創設期のレーニンの第三インターナショナルの若々しい活動にも触れてフランスから帰国した小牧近江（本名 近江谷駒）を中心に金子洋文、今野賢三、山川亮、畠山松治郎、近江谷友治らによって、大正二〇年（一九二二）年二月に創刊された同人雑誌である。

初刊は「土崎版」（秋田県土崎港で印刷された）三号で打ち切られたが、「発行部数二百部、表紙とも一八頁のリーフレットにすぎなかったが、このささやかな小冊子が反戦平和、ロシア革命の擁護、すべての被抑圧階級の解放スローガンを公然と掲げ、最も早く第三インターナショナルの紹介を行ない、ここから我が国の労働者解放運動と芸術運動の大吏に画期的な段階を切り拓く活動を展開した」（小田切進氏）。

また「追分町の下宿について早稲田に通っていた私は、学校の帰りや散歩の終りによく文武堂という店によった。

ここではじめて『種蒔く人』を見た。あとで名物になった赤バンドが、やはり刺激的だった。『共産党宣言』など容易に手に入ることが出来ず、秋水・枯川訳の『共産党宣言』をノート数冊に写してもっていったとき発行されていた。『白樺』派や『新思潮』派や、また歌舞伎や近松の方がよけいおもしろく『種蒔き』は少し荒っぽい感じだった。『種蒔く人』が大事であることがわかってきたのは、もうちょっとあとのプロレタリア文学運動がさかんになる少し前だった」（稲垣達郎氏）の言葉にその評価が言い尽すことが出来る。いわゆる「土崎版」は大正一〇年二月〜四月の三冊で終わっている。

再刊は、同年一〇月新たに佐々木孝丸、村松正俊、柳瀬正夢、松本弘二を同人に加えてあらためて雑誌版「種蒔く人」を創刊した。再刊は、時の政治弾圧を受けながら大正一二年八月まで続き、帝都震災で同人がバラバラになったのと、権力側の攻撃が強まり「種蒔き雑誌」を最後に休刊となった。

今回の再復刻版は、いわゆる「土崎版」から休刊になるまでの二四冊がそのまま復刻されたのと、「種蒔き雑誌」など、ピラ、パンフ等、参考文献が整理され納められている。価格は全刊で一セットとなり二万円。

また別雑誌となっているが、「種蒔く人」土崎版の同人である近江谷友治（附島小松治郎）伝記五〇〇円。小牧近江と金子洋文が「種蒔く人」創刊までを語った「雑草」三〇〇円などがある。

※ 詳細は、当社編集部にお問い合わせ下さい。

### ◇編集部からのおねがい◇

▽はやいものです。『社会通信』を発売していろいろ、六号を数えることになりました。読者諸氏の投稿を心からおねがいしたいと思います。

▽おねがいが二つあります。第一は、労働金庫への誌代のふりこみについてです。かならず副報告書を当社までご送付くださるようおねがいます。第二は、一月一日、一日号を合併号とすることです。また、本誌についての取扱規定は、おっけてくわしくご連絡いたします。